山室軍平著

日常生活の宗教

禁酒の勧め

復活の人

吉田 野良

要約・編集

愛あるところに天国あり

山室軍平著

「日常生活の宗教」　昭和七年

「禁酒の勧め」　明治四十五年

「復活の人」　大正四年

要約・編集　吉田　野良

憂ふる者の如くなれども
常に喜び
貧しき者の如くなれども
多くの人を富ませ
何も有たぬ者の如くなれども
凡ての物を有てり

はじめに

この小冊子は、岡山県出身のキリスト教社会事業家である山室軍平の三つの著作物を要約・編集したものです。これらの著作は近代デジタルライブラリーでご覧になれます。

アルコール依存症から新しい人生を送る人の生き方に、アルコホーリクス・アノニマスは大きな影響を与えています。私もそのビッグブックから大きな影響を受けました。山室軍平の残したもので、ビッグブックと同じような仕組みができないかと試みたのが、この小冊子です。

山室は、当時の人々にわかりやすい言葉で、キリスト教を説明してくれましたが、時代環境が異なる私たちにダイレクトに届くよう、微力ながら編集してみました。この小冊子が、少しでも皆様のお役に立てれば幸いです。

平成二十五年十二月

吉田　野良（誠）

目　次

一　日常生活の宗教

一　神……12
二　神の支配……14
三　人の堕落……18
四　悔い改め……20
五　十字架の教え……23
六　新たに造られた者……25
七　求道心の種々相……27
八　完全なる救い……28
九　今が救いの時……29
一〇　先覚者が払う偽性……31
一一　祈りを聞く神……31

一二　安心……33
一三　良心の慰め……35
一四　失意にある人……36
一五　艱難を耐えて……37
一六　自ら助けしめよ……39
一七　互いに助けしめよ……40
一八　誘惑……41
一九　地の塩……43
二〇　職業と信仰……44
二一　全ての者の下僕……45
二二　エホバに貸す……47
二三　愛あるところに天国あり……48
二四　白髪……50
二五　死に直面して……51

Ⅱ　禁酒の勧め

一　如何にして禁酒すべきか

（一）　酒の害を思いめぐらせる……54
（二）　その心得違いを悔い改めよ……55
（三）　断然、禁酒の決心をなすべし……56
（四）　上からの力に頼れ……58
（五）　即座に禁酒を断行せよ……59

二　如何に禁酒を続けるべきか

（一）　禁酒の主義を発表せよ……60
（二）　酒の場から遠ざかれ……61
（三）　神の助けを呼び求めよ……62
（四）　進撃の態度を取れ……65
（五）　救世軍に加入すべし……66

Ⅲ　復活の人

一　根岸の御前（大酒の癖から救われた人の話）

（一）　日本の「再生の人」……70
（二）　酒造家の息子……71
（三）　恐ろしい潜在意識……72
（四）　不品行と無駄使い……73
（五）　「根岸の御前」とおだてられ……74
（六）　一枚の「ときのこえ」……74
（七）　酔っぱらいの救世軍……75
（八）　途方にくれた友人……76
（九）　救世軍の一下士官……78
（一〇）　救世軍病院の巡回救護……79
（一一）　青年会館の大集会……79
（一二）　楽しんで禁酒ができる……80

（一三）　生活上における宗教……81
（一四）　怠け者が稼ぎ人になる……82
（一五）　他人を救うために働く……83

二　初春亭正子（放蕩の行いより救われた人の話）

（一）　石部金吉もあてにならない……85
（二）　親を見習っての道楽……86
（三）　金を盗んで買い食い……86
（四）　遊廓の御用聞き……87
（五）　十七日間の居続け……88
（六）　金庫破り……89
（七）　喜劇役者となる……90
（八）　素人の婦人……91
（九）　淀川に入水しようとする……92
（一〇）　母の寿命を縮める……93

（一一）　真夜中に良心の声……94
（一二）　叩けよ、さらば開かれん……95
（一三）　神の家族となる……97
（一四）　不義の関係を断つ……98
（一五）　救世軍に行く証明書……99
（一六）　酒屋の提灯を見て祈る……100
（一七）　救世軍の結婚式……101
（一八）　同業者の評判……102
（一九）　徳は得なり、理は利なり……102

三　お狂乱の利三郎（博徒の群れより救われた人の話）

（一）　一連隊の悪魔……105
（二）　コレラで死にたい……106
（三）　「お狂乱」の由来……107
（四）　博徒の群れに投じる……109

（五）石川島の監獄……110
（六）無規律な牢屋……111
（七）二十二か町の縄張り……112
（八）合わせものは離れもの……113
（九）女房を他人に譲る……114
（一〇）巡査を斬って落人に……115
（一一）自由廃業の起こった頃……117
（一二）雑誌記者を脅迫……118
（一三）愚連隊の頭……119
（一四）木賃宿の無銭者……120
（一五）命がけで尽くした親分……122
（一六）人殺しの計画……122
（一七）徹夜で小冊子を読む……123
（一八）正直の額に汗……125
（一九）汁粉屋と蕎麦屋……127
（二〇）警察官の嬉し涙……128

一　日常生活の宗教

昭和七年三月二十八日発行
著作兼発行者　山室　軍平

一　神

一人の男が、あるキリスト教徒を訪問した。キリスト教徒はその客を二階に誘い、窓から見える果樹園を指さし、「あれは息子が作った果物です」、その向うに見える数軒の住宅を指さし、「あれは息子が建てた庶民のアパートです」と話した。

そして、大きな建物を指さし、「あれは息子が経営する庶民の小学校です」と言うと、客は感心して、「息子さんはとても賢明な方ですね」と言う。キリスト教徒は「でもあなたは、まだ息子に会ってませんが…」と言う。

客は、「まだ息子さんにお目にかかってはいませんが、そのやっておられる事業を見て、その人柄を推察することができます」と答えた。それを聞いて、キリスト教徒は次のように言った。

「あなたが息子の事業をみて、まだ会ってもいない息子の人となりを察することができるなら、この広大無辺な天地を眺めて、これを作った天地の神は、なんと偉大な方であると、なぜ悟られないのですか」と言ったそうである。

◆

あるアラビア人が、朝の祈りを終り、立ち上がろうとするのを見て、ある男が「どうしてあなたは、目に見えない神が存在していることが解るのですか」と尋ねる、アラビア人は次のように答えた。

「昨夜の暗いうち、ラクダが天幕の前を通ったことが解るのは、その足跡があるからです。それと同じように、この美しい周りの景色は、神が残された足跡のようなものです。だから、私はそれを眺めて、神の存在を知るのです」と。

あるアフリカ探検家が、道に迷って、食べ物はなくなり、連れの者とはぐれる、だんだんと身も心も衰え、ほとんど絶望する時、ふと足元にある一塊の苔に目が止まった。この苔と

いえどもとても人間技の及ばない、美しい巧妙な姿をしている。

神は一塊の苔にさえ、行き届いた恵みを施しているのだから、生きた人間一人を故なく餓死させたりするはずがないと、今一度気をとり直し、神に祈りつつ足を進めたところ、幸いにも人里に出て、連れの者とも巡り合うことができたという話がある。

皆さんも速やかに真の神を認め、これを敬い、これに依って、その御心を行う者にならんことを切望する次第である。

二　神の支配

大石良雄が播州赤穂の家老を勤めていた頃、塩を造ったら大いに城下が潤うだろうと考えた町人たちが、その許可を得るため、家老の大石に面会を求め。その理由を話した。大石は、

「なるほど面白い目論見である。いずれ取り調べた上で沙汰をする。」ということだった。

町人たちは喜び、三月か半年の内には製塩許可の沙汰が下りるものと思って待っていた。しかし何の音沙汰もなく二三年が経ち、また四五年が経った。更に四五年が経ち、最初から十三年目、家老の大石からその町人たちに呼び出しがあった。

「お前たちは十三年前、製塩の許可を願い出たことを覚えているか」と問うた。「はい、心得ております」と言うと、大石は次のように申し渡した。

「十三年前、初めてあの話を聞いた時、面白い計画だと思ったが、だんだんと調べてみると、塩を煮るには薪を焚く。薪を焚くには木を伐る。木を伐ると山が裸になる。山が裸になると大雨が降ったとき大水が出る。大水が出ると田畑が荒れる。田畑が荒れると農作物ができない。農作物ができないと農民が困る。農民が困ると、わが藩が困ると気が付いた。」

「あの話があってから今日までの十三年間、植林に注意を払っておいた。もうそろそろ木を伐り出しても、山が裸になる心配もなくなったので、今から製塩を許可する」と。

それを聞いて町人たちは驚いた。こちらではただ塩、塩と、塩のことだけを考えている時に、家老は、塩のことから薪、薪のことから木、木のことから山、山のことから大水、大水のことから田畑、田畑のことから農作物、農作物のことから農民、農民のことから藩のことと、八つも九つものことを考えている。

◆

人間同士の間でも、智慧の足りない者から、知慮分別の行き届いた人々の胸中を推し量ると、何がなんだか想像のできないことがある。ましてや私たち人間が、天地宇宙の創造主である神の思し召しを推し量ることができないのは、少しも不思議なことではないのである。

聖書に「天の地よりも高きが如く、わが道は汝らの道よりも高く、わが思いは汝らの思いよりも高し」と記している。だから、私たちに大切なことは、いかなる場合も神を信じて、その御心に一切を任せることである。

私たちは、神が正しいと信じる故に、その御心に適わない一切の不義を捨て去らなければ

ならない。また、神が憐れみ深いと信じる故に、すべての罪を赦され、すべてその御心を行う者にならなければならない。私たちは、神が智慧と力に富んでいると信じる故、どんな逆境にあっても、神を頼りに安心満足を楽しむようでなくてはならない。

◆

昔、ヨブは真面目に、正しい道を歩む人であったが、不思議に降って湧いたように災難が、次から次へと押し寄せて、財産はなくなり、子ども達は死に絶え、自分は体中に腫れ物ができ、生きながらにして死んだ身体のような生活をしていた。

それでも、神の恵みと力を信じ、「彼が私を殺すとも、私は彼に依り頼む」との想いのうちに生活すると、神は彼から一切の災いを除き、以前に倍する祝福を与え、彼を幸福にしたという。キリストの言葉に「我が為す事を汝今は知らず、後之を悟るべし」とある。

三　人の堕落

デオナルド・ダ・ヴィンチの絵画で、最期の晩餐がある。その名作について、次のような物語が伝えられている。

ダ・ヴィンチは最初、イエスが十字架につく前夜の、弟子たちとの最期の晩餐であるから、イエスの顔は柔和で慈愛に満ちたものである。そのため、イエスのモデルを探し歩いて、ローマの古い教会の唱歌隊員に属する一人の少年を見い出した。

いかにもあどけない、無邪気な、まるで天使のような少年に頼んで、モデルとなってもらってイエスの姿を描いた。それから幾年か苦心を重ねて、ダ・ヴィンチは一人ひとりと弟子たちの姿を書き加え、終に十一人を終って、あとは裏切り者のユダのみとなった。

ユダを描くのであるから、どこまでも陰険で、苦々しい顔をした人物を描かなければなら

ない。それに適したモデルを探し歩いて、ローマの街頭で、ようやく一人の乞食に出会った。これをモデルにユダの肖像を描き切って、彼にその名を尋ねた。

するとその乞食は、「私は、数年前にあなたに頼まれて、イエスの肖像のモデルになった者です」と答えたという。前にはイエスのモデルになった無邪気な少年が、数年後、ユダのモデルになるほど苦々しい相貌にまで変わったのか。

それは、彼が放蕩に身を持ち崩して、犯罪を重ねた結果、そのような姿になったのである。これは、彼一人に限ったことではない。人は皆、神を忘れ、罪に身を穢して、災いを身に招き、無用有害な日を送り、煩悶苦慮の一生を過ごし、限りなき滅亡に堕ちて行きつつある。

人は皆、神の子と呼ばれるはずであるのに、間違った世渡りをしているのである。キリストは、このような罪に堕落した人間を救うのである。心を改め、新しき人となり、新しい生活を営む人間となって、真の人間一生の世渡りをしなければならない。

◆

昔、源義経が幼く、まだ牛若丸と呼ばれていた頃である。源氏が没落したため、鞍馬山に送られ、頭を丸めて坊主になっていた。ある日偶然、源氏の系図が手に入り、それを繙いてみると、自分は清和天皇の血を引いた、源氏の一名将の子であることがわかった。はっきりと判ってみると、いつまでも坊主になってなど居られず、それからは文武の道を攻究して、その再興のために奔走するに至ったという。

私たちは神の子であるにも関わらず、罪と悪のために堕落している。キリストは、私たちを罪の堕落から救って、幸福にして、また有益な、神々しい生活に入らせてくれる方である。。

四　悔い改め

悔い改めというのは、ただ後悔することではない。世間では、自分の罪を後悔して、また同じことを繰り返す人が多い。また、悔い改めというのは、ただ懺悔するという意味でもな

い。世間には、自分の不義不徳の行いを吹聴して恥じない人さえ少なくない。

悔い改めとは、自分がこれまでに犯した罪を悔いるとともに、力の及ぶ限り、これを改めることである。世間には、自分の犯した罪の悪いことには気が付きながら、敢然と改める心のない人がとても多い。

しかし、いくら固い決心をしたつもりでも、つい同じような行いを繰り返すのをどうしたらいいのか。それは、キリストを信仰して、神の前にこれまでの罪の赦しを求め、今後は罪に打ち勝つ力を与えられるように願うことである。

キリストは、私たちの過去の罪を赦すだけでなく、これからは以前と違った、善良な生活を営むように、私たちの心を変えて、新しくしてくれるのである。キリストに対する信仰は、私たちの悔い改めを完成し、私たちの罪の力とその報いから救い出してくれるのである。

私たちが神の前に、その犯した罪を悔い改めたことが本当であるなら、私たちは、人に対して不義理をし、迷惑をかけたのを悔い改め、その詫びをするだけでなく、誠心誠意これに対して弁償しなければならない。

聖書に、取税人長ザアカイという人が、自分の罪を悔い改めるとともに、これまで不義理をし、迷惑をかけた人には、ことごとく四倍にして弁償したとあるのは、その好い例である。

酒を飲む者は悔い改めよ、放蕩する者は悔い改めよ、カフェーに浮かれ歩く者は悔い改めよ、遊廓に出入りする者は悔い改めよ、不義の利得を貪る者は悔い改めよ、嘘偽りを言う者は悔い改めよ、弱者に対する思いやりのない者は悔い改めよ、自分の本分を怠る者は悔い改めよ。

人を憎む者、呪う者、妬む者、高ぶる者、誇る者、奪う者、盗む者、貪る者は悔い改めよ。すべてわが良心に省みて、やましい所のある者は悔い改めよ。

人間は誰も、神の前に罪を犯さない者はいない。人が貴いのは、最初から罪を犯さないことではなく、その犯した罪を、素直に悔い改めることである。そして、悔い改めて、キリストを信じ、その救いを受け、以前のような罪を繰り返さない人間にしてもらうのである。

五　十字架の教え

昔、ローマ帝国では円形劇場において、剣での勝負を、多数の観客が喝采しながら見物するということが行われていた。ある時、双方が抜身で立ち会おうとする瞬間に、老いた宗教家が躍り出て、二人の間に割って入り、両手を上げて次のように叫んだ。

「人と人とが互いに命のやりとりをするのを、喜んで見物するような野蛮な行いは、神が憎むものである。止めなさい。」と。これを見ていた観客はどよめき、「老いぼれ、引っ込め」。「引っ込まなければ殺してしまえ」と歓声が沸き、とうとう彼は刺し殺されてしまった。

しかし、その人々も後になって考えてみると、あの老人が行ったことは正しいことであった。彼が命を捨ててまで、ローマ市民を戒めたのは、高貴な献身的な行動であると悟った。それ以来、二度とこのような残忍な催しをしないことになったと伝えられている。

この老人の死が、ローマ市民を残虐な真剣勝負の果し合いから救ったように、キリストの十字架は、すべてのこれを信仰する者を、一切の罪から救う力となったのである。人がこれまでに犯した罪を悔い改め、十字架に頼れば、神はその胸に新しい心を授け、以前とは違う人間にならしめ、神と親子の関係に入らせるのである。

◆

伊予今治沖のある島に、長さんという命知らずの暴れ者がいた。ある時、その長さんが島中の人を相手に喧嘩を始めたのである。「さあ、誰でも来い」と叫びながら、暴れまわる姿を見て、家々では戸を閉めて「気違いの相手になるな」と、互いに戒めたのである。

その様子を見て長さんは、勝ち誇った気になり、ますます勢い込んで暴れていると、後ろの方から、「長さん、母親が死んだよ」と呼ぶ声があった。それを聞いて、家に帰ってみると、彼の母は、島の人たちに申し訳がないと、首をくくって死んでいた。

長さんは、自分が殺される以上のことはあり得ないと高をくくって、喧嘩に取り掛かった

が、彼を案じてくれる母が家にいたことを忘れていたのである。人は皆、その罪を悟り、これを悔い改め、正しく、清く、楽しい、明るい生活を営むことが何より肝要である。

六　新たに造られた者

私たちがキリストを信じて、その救いを受けると、私たちは「新たに造られた者」となる。ありふれた言葉では、「生まれ変わった人間」となるのである。どういう意味かというと、第一に、キリストによって新たに造られた者は、新しい理想を持った人間になるのである。

これまでは、ただ名誉を求め、利益を求め、目の前の一時の快楽を求める以上に、何らの目的もなかった人が、その後は、神のため、人のために、生き甲斐のある世渡りをするような心がけになってくる。

したがって、これまでのように、酒を飲んだり、不品行をしたり、嘘偽りを言ったり、軽薄で不真面目なことをするのが心苦しくなり、もっと引き締まった、真面目な一生を送らなければ満足できないようになる。

◆

第二に、キリストによって新たに造られた者は、新しい力を持った人間となるのである。人はとかく善と気付いたことを実行できず、悪と気付いたことを改めることができない、とても意気地のないものである。そのため、幾度か、これまでと違う世渡りをしたいと決心しながら、元の木阿弥となることが多いのである。

しかし、キリストの救いは、私どもに新しい力を授け、これまでに勝てなかった悪に打ち勝ち、また、これまで行い得なかった善を行い得るようになるのである。

◆

第三に、キリストによって新たに造られた者は、事実上、新しい生活を営む人間となるの

である。聖書に「汝等は地の塩なり」、「汝等は世の光りなり」とあるように、キリストに救われた者は、後に、この世の腐敗を止める塩、その暗黒を照らす光の生活を営むのである。この世の軽薄な、暗い行いと調子を合わせるのではなく、この世の浅ましい、罪の穢れを清めようとして生きるのである。

七　求道心の種々相

或いは罪よりの救いを求め、或いは神の真理を探究し、或いは生き死にの問題の解決を求める等、その出発点には相当の違いがあるが、いずれもキリストに来たって、これが満足なる解決を見出したところは、全く同じことである。キリストは、「凡て彼を信じる者」を救って、永遠の生命を継がせる所の救い主である。

八　完全なる救い

クロムウェルが英国を支配した頃、宮廷付の宗教家にハウという人があり、クロムウェルの前に出る度に、必ず誰かの身の上についての願い事をするので、クロムウェルはある日、彼に向かって次のように問うたという。

「君はいつもいつも、私の顔を見れば誰かの願い事をするが、自分自身のためにはいつ願い事をするのか」と尋ねると、ハウは「このように、他人のために願い事をするのが、そのまま私の願い事です」と答えたという。

◆

キリストが、私たちを完全に救ってくれるというのは、次の二つの意味がある。一つは、キリストがどれ程の罪悪の深みにはまり込んだ者でも、見事に救ってくれるということである。すなわち、どれほど意思が弱く、悪の習慣にとらわれた者でも、キリストはその人の罪

を赦すだけでなく、これに新しい命を与え、新しい力を授けて、そうした情けない状態から救い出してくれるのである。

二つに、キリストは、総ての罪より救ってくれるという意味である。ただ目立った、露わな罪から救うだけでなく、隠れた一切の罪から清めてくれるのである。私たちは、ただ酒を飲まないとか、放蕩しないとかいう目立った悪から救われるだけでなく、進んで神の心を宿し、愛の人となって、専ら神を愛し、人を愛するために生きる人間になるのである。

九　今が救いの時

西洋の喩え話に、一人の青年が新たに悔い改め、真面目な信仰生活に入ろうとしているのを、悪魔の大将であるベルゼブルが見出し、その子分を集め、「あれを引き止める方法はないか」と聞くと、子分たちはいろいろな考えを述べた。

ある子分は、「彼を取り巻いて、その善を行うことは窮屈であり、耐え難いことを説き付けよう」と言い、他の子分は、「彼を取り巻いて、罪の歓楽と面白さ、忘れがたいことを説き付けよう」と言ったが、悪魔の大将は満足しない。

「罪の歓楽は面白いようでも、後が悲しいことや、善をするのは窮屈なようでも、胸に慰安があることは、彼も大分気が付いたようだから、そんなやり方ではだめだろう。もう少し気の利いた計略を持った者はないか」と尋ねると、一人の子分が次のように言った。

「私は、彼の所に行って、その悔い改めの決心が素晴らしいこと、信仰の志の結構なことを褒めてやる。そして、それにしてもそんなに急ぐことはないだろう、まあゆっくりやりなさいと言って、彼に油断をさせて、そのうちに追々、その熱心さに水を差してやろうと思いますが、いかがでしょう」と。悪魔の大将は喜び、「でかした、その計画で彼を陥れて来い」と言い、その子分を送り出したということである。

それ故、私たちは何を措いても、即刻、直ちに罪を悔い改め。キリストの救いを求めることが肝要である。

一〇　先覚者が払う犠牲

例えば、同じ工場に勤める人たちが、皆酒を飲み、不身持ちをなし、汚らわしい話ばかりするような中で、一人だけキリスト教徒としての生活を営み、酒を飲まず、煙草を吸わず、不品行、不道徳をしないばかりか、誠実を旨とし、己が職分を忠実に行い、事々に神の栄を顕そうとすることは、一方ならぬ骨折りがある。

こうした場合、いたずらに人の顔を怖れたり、世間の思惑に気を使ったりするのではなく、断然、その正しいと信じるところ、神の主旨と認めるところをやり抜かなければならない。こうしてこそ、私たちは初めて自分を救うことができ、他人を救いに入らせることもできるのである。

一一　祈りを聞く神

本当の祈りは、私たちの願いを神に叶えてもらうことではなく、私たちを神の意思に合致させることである。小舟から大船に綱をかけて引っ張れば、大船は小舟の方へは寄っては来ないが、小舟は大船の方に引き付けられる。

同じように、本当の祈りは、神を私たちの望みどおりに引き回すことではなく、私たちが「神の意の善にして悦ぶべく、かつ完全なることを弁え」、これに身を当てはめて、そのように行う者にならせていただくのである。

◆

マルチン・ルターの友人にメランヒトンという人があった。その人は、「思い煩いは、私を駆って祈りに行かしめる。しかし、祈りは、思い煩いを駆逐して、私から去らしめる」と言っている。

私は、この小冊子の読者が皆、神に祈りをする人間になることを切望している。これは、あなた方を清くし、高くし、また強くし、勇敢に善事を行い、大胆に罪悪と戦い、いかなる

窮地に身を置いても失望しない人間に導く道である。

その上、あなた方は、自分のためだけでなく、親戚や友人のために祈り、同胞のために祈り、世界人類のため神に祈ることによって、彼らの救いを早め、彼らの福祉のために尽くすことができるのである。

一二　安心

一般の人々が、安心とか、満足とかいうのは、おおよそは食べたいものを食べ、飲みたいものを飲み、やりたいようにやって楽しむことである。それでは、キリストを信仰する者に与えられる安心とか満足とは、いかなるものであろうか。

第一は、罪から救われて、清い心をもつことである。人は、キリストを信じ、その力に依

頼して、すべての罪と穢れから清められ、心に一点のやましいところがない生活をすること。ここに、言うに言われぬ安心と満足が心を支配するようになるのである。

第二に、キリストを信仰する者に与えられる安心と満足は、自分の本分を行ったという確信に根ざすものである。一生の天職があるように、一日には一日の本分がある。その一日一日の本分を、神の前に果たし得たという心の満足は、何にも替えられない貴いものである。

第三に、キリストを信仰するものに与えられる安心満足は、愛の奉仕に伴うものである。自分だけを考えず、他人のために尽くすようになると、何とも言えない喜びが湧いてくる。本当の喜びは、神のため、人のために、何分かの骨折りをした後に経験することができる。

第四に、キリストを信じる者は、まさかの時に頼りとすべき神があるから、世の人の想像さえ及ばない、真の安心と満足を楽しむことができる。不景気のどん底にあって、なお笑顔を続ける方法は、神から与えられる、真の安心と満足を楽しむことである。

一三　良心の慰め

マルチン・ルターは、宗教改革のために、容易ならざる反対や迫害を受け、殊にウォルムスの大会に臨んだ際は、まかり間違えば直ちに刑場に護送され、火あぶりにして殺されるかも知れない危険に身を置きながら、それでも彼はその主張を曲げなかった。

彼は、大胆にその言うべきことを言い終わった後に、大声で「我、良心と共にここに立てり、他になすべき所を知らず、神我を助け給え。」と叫んだ。彼は、目に余る反対者、迫害者の中にあって怖れず、あくまでもその良心の命じる所を行ったのである。

◆

米国で奴隷廃止の恩人であるガリソンは、その硬直な議論のために多数の敵をつくり、彼らに蹴られたり、殴られたり、大道を引きずり回されたりして、危険で仕様がないから、彼を刑務所に入れて、保護を加えるようになった。その時に、彼は次のように言った。

「私は今、ただ一人、刑務所に入れられている。しかし、その実、私は独り刑務所にいるのではなく、他に二人、私と同伴しているものがいる。それは、善き良心と、快活なる精神である。」

◆

ガーフィルドは、誰に責められるより自分自身に責められることを怖がり、誰に誉められるより自分自身に誉められることを無上の栄誉としていたと言われている。私たちはいつも良心に慰めのある世渡りをしていたいものである。「良心の声は、神の声だからである。」

一四　失意にある人

人間万事ことごとくわが予期するところと反対に、することなすこと、わが身にとって不利益にのみ転じて行くように見える場合には、一体どうしたらよいのだろうか。

このような場合に、神を信じる固い信仰があり、誰一人として自分を理解、同情する者がいない時にも、なお神は自分を知って、自分に慰めと援助を与えてくれると確信し、艱難辛苦の中にも、イエスの十字架を見上げて、これを耐え忍ぶことのできる人は幸いである。

「我らが受けるしばらくの軽き艱難は、極めて大なる永遠の重き光栄を得しむるなり」、「汝等の忍ぶは懲らしめのためなり、神は汝等を此の如くあしらい給う、誰か父の懲らしめぬ子あらんや」、「艱難をも喜ぶ、そは艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。希望は恥を来らせず、我らに賜いたる精霊によって、神の愛我らの心に注げばなり」

こうした聖書の言葉を身に経験するものには、いかなる失意の境遇をも、百花繚乱の花園を通るような気持ちで、喜びつつ、勇みつつ、過ぎゆくことができるのである。

一五　艱難を耐えて

神を知らない人は、艱難辛苦の真の意味が分からない上に、また切羽詰まった時の相談相手がないから、ややもすれば、何でもないことに失望落胆して、果ては自殺を企てるようなことさえ稀ではない。

しかし、神を信じる者には希望がある。艱難辛苦の中にも、毅然としてこれに耐えることができるだけでなく、その間に自らを練り鍛え、また、他人を益するような生活を営む場合さえ少なくない。

ある青年が若い妻と遠国に赴き、新しい事業に着手すると、引き続き思わぬ災難がその小さな家庭を襲って来た。事業は一向に思わしく行かない上に、二人の健康が衰え、殊に主人の片目が失明し。幼い子どもも死ぬというようなことが続いた。

それにも関わらず、彼は神を信じ、物事の明るい面を見ることに努めたのである。ある夜、彼はその妻を呼んで、静かに語りつつ、「それにしても、我々二人が神から受けている恵みは、まだまだ甚だ多い。それを一つずつ数えてみよう」と言った。

鉛筆をとって、思い出すままに、彼らが神から受けている恵みの数々を書き上げてみた。先ず彼らが生命を与えられていること、相当の知慮、判断と、ある程度の活動に耐える健康とを与えられていること、自然の作物を授けられていること、罪を赦され、キリストの救いに入り、聖書を読むことを知り、祈りを知り、喜びと平和と、愛とを与えられ、幾分は他人に奉仕できることなど、考えれば考えるほど、際限のない恵みが与えられていることに気付いてみると、真に嬉しく、喜ばしく、もう一度、気を取り直して奮闘を続けたという。

私たちは神によって、耐え難い艱難辛苦を耐え忍ぶのみならず、一層深い神の恵みを味わい、自分の精神と人物を鍛え上げ、神の栄を顕し、人の益を図るものにならなければならない。難儀苦労も畢竟、神の大いなる慈愛の手から与えられた祝福に外ならないのである。

一六　自ら助けしめよ

ある時、二匹のカエルが、牛乳を一杯入れた缶の中に落ちた。一匹のカエルはもう駄目だとあきらめて、じっとしていたら、やがて溺れて死んでしまった。もう一匹の方は、及ばないまでも努力してみようと、夜通しもがいて、もがいて、もがき抜いたら、牛乳が朝までに、バターになったという話がある。

私たちはどんな行き詰ったような中にも、神が私たちに付き添っていて、辛抱のできない試練に合わせることはない、いかに行き詰ったような中にも、必ず逃れる道を用意しておいて下さることを知れば、どんな時にも失望することがない。いつも明るい、希望を抱いて、七難八苦の中を突破することさえ出来るのである。

一七　互いに助けしめよ

私たちがキリストを信じ、罪から救われたという時は、私たちはそれ以来、自分のためだ

けを考えず、他人のために思う人間になることを意味する。私たちは他人を思いやり、他人を慰め励まして、共に神への奉仕を勤めるようになってこそ、初めて真のキリスト教徒であることも出来るのである。

パウロも、幾度か「わがために祈ってくれ」と、その友人知己に頼んだものである。自分のために、誰かが祈ってくれていることを知るのは、私たちにとって大きな力であり、励みである。私たちは何もできない時にも、他人のために祈ることはできるのである。

一八　誘惑

私たちは、その人生の航海において、幾度か妖魔の誘惑に出会うことがある。すなわち、この世の栄華や、飲み食いの歓楽や、浮いた慰み、貪りなどは、私たちのその航路に待ち受けて、邪道に引き込み、やがて永遠の滅亡にさへ引き落とそうと試みる。

このような場合に、そんないかがわしいものは見るな、聞くな、そばに近づくなと戒めるのは、結構なことであるが、やり方が消極的である。窮屈で、不自然で、甚だ実行しがたいところがある。

しかし、ここに今一つ、それとは異なる方法がある。人が神を信じ、キリストに救われ、一心に善行を励む間に、自ら一切の悪事から遠ざかり、また種々な誘惑を免れるというやり方が、それである。

人はキリストに救われて、清き心の喜悦、善をなす快楽、他人を祝福する幸福等を経験するようになると、この世における、目前一時の歓楽や栄華など、見返る必要がなくなるのである。明るい気分で、立派にそれらの誘惑をくぐり抜けることができるのである。

私たちは、もっと明るい、幸福な、宗教的経験を有するものになりたい。すなわち、すべての罪を赦され。神と和らいで、清き心の喜び、善をなす楽しみ、また他人を祝福する幸福等を満喫するものである。

一九　地の塩

塩の用は物の腐敗を止める所にある。北海道の鮭が、日本全国に輸送されて腐敗しないわけは、これに塩をしているからである。キリストに救われ、正しきを行い、愛を行う人物は、この世の塩である。とかく名誉や、利益や、快楽などに心迷い、とんだ腐敗に至らんとするこの世を防衛し、その腐敗から免れしめるものは、神を敬う所の義人の力のみである。

塩は多くの場合、何らかの中に溶け込み、その姿を隠し、そうしてその腐敗を止め、味を調製するものである。そのように、神と人とに尽くす人物は、社会のどこかの隅に身を隠し、民衆の中に混ざり込み、縁の下の力持ちとして、貴き奉仕を続ける者である。すなわち、己をなくして、神の栄のために偽性となるものである。

二〇　職業と信仰

キリストを信仰する者は、ただ、職業と信仰が両立するとか、互いに相待つとかいうのみでなく、進んで、私どもの職業を通じて、神の栄光を顕し、また世の人の救いのために、尽力しているようでなければならない。

私たちの職業は、神に仕えるように、これを営むべきものである。したがって、説教者が神の栄光を顕すために説教するのと同じように、実業家は、その商売家業を通じて神の繁栄を現し、これによって世を改め、人に尽くし、また罪人を救いに導かねばならない。

私たちも、毎日の職業を、そのまま神の国の建設のために、勤めるようでありたい。私たちは「御国の来たらんことを、御心の天の如く地にも行われんことを」と、口先ばかりでなく、衷心から祈りつつ、各々が神から授けられた本分を行うものにならなければならない。

二一　全ての者の下僕

世には、巨万の富を得たいとか、大事業をやってみたいとか、人の上に立って采配を振ってみたいとか、世俗的で利己的な大望を抱いて、浮身をやつす人々が多い。しかし、この種の大望は、それを果たしたところで、決してその人に本当の満足を与えるものではない。

太閤秀吉は、あれほど爽快で雄大な生活事業を営んだにも拘らず、その臨終には「露と置き露と消えぬるわが身かな　浪速のことは夢のまた夢」と歌わざるを得なかった。

紀國屋亦左衛門は、主人から言い付けられるまま、百両の金を千両に、千両の金を万両に、万両の金を十万両にしたが、今一辺その十万両を百万両にしろと要求された時に、これを辞して、頭を丸めて坊主になり、「落ちてゆく奈落の底を覗き見む　いかほど深き欲の穴かと」という歌を詠んだと伝えられている。

世俗的、利己的な大望を果たしてさえ、そうであるから、ましてこれを果たし損なった者

の不満足、失望、悲痛、落胆は全く言語道断である。

キリストの教えによれば、この世で最も貴い人間は、金銭や、名誉や、権力などを握り、人の上に立って命令する者ではなく、己を忘れて、他人の下僕となり、しかも「全ての下僕」となって、一人でも多くの人々に、愛の奉仕をする者のことである。

私たちが真に偉い人間になりたいなら、私たちは人を使う人間になるのではなく、人に使われる人間になり、人に手数をかけるのではなく、少しでも多くの人の面倒をみるために、苦労をする者となるよう、心掛けねばならない。

◆

しかも、奉仕の中の奉仕と言うべきは、人を罪から救うために働くことである。なぜなら、これはその人を全ての災いの根から解き放ち、真の満足と安心とを楽しむものとならしめ、意義ある生活を営ませ、永遠の命を繋ぐ者とならしむる所以だからである。

大阪の林歌子女史は、宗教に、禁酒に、廃娼に、その他矯正、慈善の事業に、一方ならぬ尽力をしている人であるが、かつて自ら「私は大阪の小小使いであります」と、言われたことがある。

私たちは、まず罪より救われ、他人を罪から救うために生き、日本国民の小使いとして、あらん限りの心尽くしをしてみたいものである。すなわち、「全ての者の下僕」たる、貴い一生涯を送りたいものである。

二二　エホバに貸す

初代のキリスト教徒は、貧民のために尽くすことが多かった。

ある時、キリスト教の反対者が一教会を襲い、「ここにある大事な宝物を、皆差し出せ」

と要求した。すると、聖ローレンスは奥に入って、そこに保護していた貧民、病人などを連れて来て、「これらは私どもが何より大事にし、珍重している宝物である」と言うと、迫害者はすごすごと帰って行ったという。

二三　愛あるところに天国あり

みぞれが降りしきる中、二人の少年が歩いていた。よくよく貧乏なのか、靴を履いてない。大きい方が小さい方の子を背負って、冷たい敷石の上を歩いている。それを見た人が感心して褒めると、少年は「こうして弟を背負ってやれば、弟は足が冷たくないでしょう、その代わり僕は背中が暖かいのです」と答えたという。

今の世の中は、いろんな面で不完全な点が多いので、段々とその制度や組織等に、改善を加える必要がある。しかし、それら外面の改善と同時に、更に大切なものは、内面に、神を

愛し、人を愛する愛の精神である。

愛の精神のない世界は、どんなに外部の制度組織が改まっても、私利私欲の鉢合わせである。身勝手な罪悪の横行する世界であるから、そんな中に私たちの真の幸福も、満足も見出される道理がない。

キリスト教は、人を罪より救う宗教である。私たちが、すべて、小さな私から救われて、神の愛を心に宿し、ただ神と人とを愛するためにのみ、生き永らえるものとなることである。つまり、キリストを信じるとは、神の愛を心に宿し。これを身に行うことである。

◆

ある時、一人の富めるキリスト教徒が、その教師に、「昨日、あなたは天国について説教をされましたが、しかし、天国がどこにあるかはお話になりませんでしたね」と言うと、教師は「それは、今お話し申し上げてよろしいですよ」と答えて、次のように語った。

「私はたった今。向うの貧しい寡婦の家を訪問したのですが、その主婦は病気で、三人の子どもはひもじい思いをしていました。ですから、あなたが、今から町に行って、パンと野菜と肉を、毎日あの家に届けるように注文し。また石炭を持って行くように依頼してから、あの家を訪ね、病人の枕元で、詩篇の第二十三編でも読んで聞かせ、一緒にひざまずいて、神に祈ってみてください。そうすれば。その祈りの終わらないうちに、あなたは天国がどこにあるかを見いだすことでしょう。」

愛のあるところに、神がいるのである。愛の支配するところに、天国が見いだされるのである。私たちは、罪から救われて、愛の実行者にならなければならない。

二四　白髪

「人は皆。長生きをすることを願っても、年をとることは願わない」と、スウィフトは言

った。そのとおり、人はとかく、年取ることを願わないのである。しかし、キリスト教は、老人に希望を与える。老人に幸福と満足を与える宗教である。

第一に、神を知る老人は、神の恵みのありがたいことを知る者である。

第二に、神を知る老人は、謙遜な者である。

第三に、神を知る老人は、他人に同情する。

第四に、神を知る老人は、その青年、壮年の時代に播いた種を収穫するのである。

第五に、神を知る老人は、天国に移されてもよい用意ができているから、幸福である。

二五　死に直面して

京都同志社の教師をしていたゴルドン博士の話に。「青年時代に南北戦争に出陣し、敵とわずか一マイル隔てる所に野営して、明日はいよいよ交戦だというその前夜、自分は今更のように、人間の命のはかなさを考えて、身を神に捧げました」と言われるのを聞いた。

人間一度は死ななければならないもので、そういう今にも死ぬかも知れないと、真面目に考えるなら。私たちは食ったり、飲んだり、浮かれたりして、目前一時の生活に満足していることができず、どうしても神を慕い、永遠の命を求めずにはいられなくなるはずである。

人は皆死ななければならないものであるが、私たちはいつ死ぬか分からないものであるとすれば、お互いに機会のあるうちに、速やかに悔い改めて、キリストを信じ、神と和らいで、いつその前に出ても、差し支えない人間になっているべきではないか。

Ⅱ　禁酒の勧め

明治四十五年七月十九日発行

著作　山室軍平

一　如何にして禁酒すべきか

私たちは、どのようにして本当に酒嫌いの人になり、厳重に禁酒を実行する者になることができるのであろうか。

それは、自分自身に固く禁酒の決心をすると同時に、進んで神にすがり、その力によって霊魂を入れ替えられ、心から酒はもちろん、一切の悪しき行いを憎み、かつ厭う人間として再生するより外に道はない。今から、順序立て、この最も確実な、禁酒の方法について説明したい。

（一）　酒の害を思いめぐらせる

まず大切なのは、具体的に酒の害について思いめぐらせることである。

（二）　その心得違いを悔い改めよ

次に大切なことは、これまでの心得違いを悔むことである。人はとかく他人のみを咎め、自分を責めることは足りないものである。私たちは酒の害が大きいことに気づき、他人に非常な災いを及ぼしている事実を認めたならば、直ぐにそれをわが身の上に引き当てて考え、我とわが身を吟味するところがなくてはならない。

ある時、一人の酒飲みがあり、しらふの時には猫のようにおとなしいけれど、酔うと何でも手当たり次第に取って投げ、狂犬のように暴れまわる癖があった。妻が酔いの覚めるのを待ってこれを諌めると、「私が何でそんな乱暴などするものか」と言って笑っている。

仕方がないから、妻は、ある日、夫が酔って、膳椀皿鉢などを取って投げ、大乱痴気を演じた後、大の字になって寝ているところを、近所の写真屋に頼んでレンズに取り込み、夫のしらふの時に見せると、夫は初めて自分が酔って醜い状態を自分で認め、それより以後は、杯を手にしなかったという話がある。

（三）　断然、禁酒の決心をなすべし

その次は、断然禁酒の決心をすることが必要である。酒を飲めば身体を痛めるとか、金が使えるとか、世間の信用を失うとか、そういう利害損得ばかりでなく、このような不心得を行うのは、神の前に罪であるからこれを改めるという、是非善悪の念が先に立つようでなくてはならない。

損得づくの勘定で事を行う人は、また損得づくの勘定で心を翻す恐れがある。酒は身体を痛めると言えば、少々飲む方が薬になると言う。金がかかると言えば、他人が飲ませてくれる時はよいと言う。世間の信用を失うと言えば、目上の人と近付きになる場合は別であると言う。このように利害の思惑で動く人は、簡単に利害の思惑によって陥れられる憂いがある。

しかし、是非善悪の信念によって事を判断する者は、目先の小さな損得づくに迷わされず、堅気にその身を保つことができる。私たちは禁酒の問題に対しても、更に進んで、これは神の前に罪の行いであるから、断じて禁酒するというようでなくてはならない。

◆

ある時、一人の巡査が救世軍のある士官を訪ね、「私は酒が好きで止めることができないが、どうしたものであろうか」と問う。士官は問い返して、「あなたは、これまで盗人をしたことがありますか」と言う。巡査は立腹して、「いやしくも職を警察に奉じる者に向かって、盗人をしたことがあるか、とはどういうことですか」と言うのに対して、士官は静かに「あなたは盗人をしたことがあるかと問われて、立腹されましたが、なぜ、あなたは盗人をしないのですか」と問うと、「それは悪いことだからである」と答える。

「それでは、酒を飲むことは悪いことではないのですか。あなたが、もし本当に酒を止めたいなら、それは決して難しいことではありません。」「酒を飲むことも、また盗人をするのと同じく神の前に罪である、人の道に背くことであると観念してみなさい。そうすれば、直ぐに禁酒が出来るでしょう」と言うのを聞いて、その巡査は「なるほど、そういう道理でしたか、よくよく分かりました」と、その時から悔い改め禁酒したそうである。

このように禁酒の実行に大切なことは、これまでの飲酒の行いが罪悪であったことを認め、

以後はどんなことがあっても、断然これを改めるという決心をすることである。

（四）　上からの力に頼れ

その次に必要なことは、神の力にすがることである。人間は、自分で自分の身の行いを改めることさえ出来ない、極めて意気地のないものである。しかし、人が真心からこれまでの不心得と罪の行いを悔悟し、これを改める決心で神に頼るなら、神は救い主キリストの救いにより、その人のこれまでの罪を赦すだけでなく、その心を入れ替え、前とは違って酒を飲むことはもちろん、一切の不真面目な行いを嫌う者とならせてくれる。

これは不思議なような話である。しかし、実際に経験してみるなら、誰にも直ぐなるほどと合点がいく事実である。これは、飲みたい酒を我慢するのとは異なり、誠に心から酒嫌いの人となる方法である。

（五）　即座に禁酒を断行せよ

今一つ大切なことは、思い立った日を吉日と、即刻その場で禁酒の門出をなすべきことである。マムシに手を噛まれた人は、毒が全身に回る前に、思い切ってその腕を切って捨てるように、およそ酒に耽るとか、色に溺れるとかいうような、危険な行いに足を踏み込んだ人は、これは悪かったと気付いたその時、猛然として決心し。手を切り、目を抉って捨てるほどの切なる思いをしても、断然これを改める覚悟が何より大切である。

いつかいつかと日延をするような人は、いつまで経っても真面目な生涯に入る機会がないものである。しかし、断然決心して堅気な世渡りを始める人は、わが身ばかりか多くの人びとの鏡となって導くことができる。

「世の中は一日のほかはなかりけり、昨日は過ぎて、明日は知られず」、今という今のうちに、直ぐ禁酒の実行に取り掛からなければならない。

二　如何に禁酒を続けるべきか

如何に禁酒すべきであるか、と同時に、是非考えておかねばならないのは、如何に禁酒を続けるべきかという問題である。

なぜかと言うと、世には一旦思い立って酒を止めながら、たちまち以前の酒飲みに後戻りする人々が、甚だ多いからである。そうであるなら、私たちはどのようにして禁酒を持ち続けることができるのだろうか。

（一）　禁酒の主義を発表せよ

先ず大切なことは、新たに禁酒の主義をとったことを、ありのままに知人や同僚に発表することである。それを曖昧にしておくようでは、酒飲み仲間から足元を見られて、つけ入ら

れる恐れがある。

初めから大げさに発表して、もし途中で挫けることがあったらと心配する者があるが、そういう腰の弱いことで、どうして一念を貫徹することができようか。思い切って自分の新しい決心を、その家族にも友人にも知らせてしまった方がよい。好きな酒を禁じて真面目な世渡りをしようというのに、何の人前を恥じる必要があろう。大胆にその禁酒の主義を宣言して、断然、酒飲み仲間を抜けたことを世間に発表した方がよい。

「私は感ずるところがあって禁酒しました」と、大胆に言ってしまえば、口ではこれを嘲る人がいても、内心では、「それは感心、よく思い切って禁酒したものだ」と、敬服して、間もなくあなた方を立てて通すだけでなく、まさかの時には「どうしたら、私もあなたのように禁酒ができるのだろうか」等、相談に来るのは必定である。

（二）　酒の場から遠ざかれ

次に心得るべきことは、なるべく酒の場から遠ざかることである。盃に向かわなければ忘れているものを、わざわざ危険に近付いて、せっかくの決心覚悟を打ち壊すようなことがあってはならない。

キリストは「我らを試練に遭わせず、悪より救い出し給え」と、祈るべきことを命じている。私たちは、わざわざ好んで試練の中に身を投じるようなことがあってはならない。私たちは絶対必要な場合以外は、なるべく酒の場から遠ざからなければならない。

（三）　神の助けを呼び求めよ

その次に心得るべきことは、神に祈りをすることである。「祈りは人をして罪を犯すことを止めしめ、罪を犯すことは人をして祈りを止めさせる」という言葉がある。酒が欲しくなった時に祈りをする人は、やがて酒が欲しいなどという賤しい根性が無くなってしまうものである。

◆

ある工場の職工長は、有名な酒飲みであったが、ある時、急に酒を飲まなくなった。「どうせ長いことはない、今にまた飲みだすよ」と、皆は笑っていたが、不思議にも今度ばかりはいつまでも禁酒が続く様子である。ある日、支配人がその職工長に、「君の禁酒の決心もずいぶん続くようであるが、今度はものになりそうだというではないか」と尋ねた。

職工長は答えて、「はい、今度こそは大丈夫です」と言う。「どうして大丈夫か」と問うと、「今度は、一時間に一回、祈りをしておりますから」と言う。「どういうことか」と問うと、「私のように癖の悪い酒は、神に祈ったところで、日に一度や二度では足りないと思い、一時間に一回、祈ることにしたのであります。」と答える。

「すなわち、朝五時に目を覚ますと、まず神様に向かって、どうか六時までは酒が欲しくなりませんようにと祈る。それから、六時まで我慢ができると、今度はまた、どうか七時まで酒が欲しくなりませんようにと祈る。こうして、一時間毎に一回、酒が欲しくならないように神様に願っておりましたところが、今日ではもはや一向に酒のことを思わぬようになっ

たばかりか、どうやら酒の匂いを嗅ぐのも厭になって来たようです。ですから、今度の禁酒はこれまでと違い、きっといつまでも続くと思います」と言ったそうである。

◆

あなた方もまた、酒が欲しくなったら直ぐに神様に祈りをしなさい。人から酒を勧められた時、その他すべて良くない誘惑に遭った時、直ぐに心の中で神様に祈りなさい。「ああ神様、どうか今、私をこの誘惑から救ってください」と。

あなた方が、神様に祈り、キリストにすがれば、神様はあなた方の心に、酒を飲んだ頃には知らなかったほどの安心、満足と真の勇気を授け、喜び勇んで一切の悪を退け、すべての善きことを励む者に導いてくれる。

一言でいえば、真の宗教の中には、酒で得られなかった一切の善いものが、ことごとく備わっているのである。酒を止めると共に、その代わりとして宗教上の慰めを求めれば、仕方なく酒を止めるのと違い、もっと気の利いた物を見付けるために、未練なく酒を捨てること

ができるのである。だから、二度と再び後を振り向く必要がなく、勇んで励む道に進むことができるのである。

それ故、禁酒を続けたいと思う人は、酒が与えることの出来ない力と慰めを与えてくれる、神様の恵みに依って頼まなければならないのである。

（四）　進撃の態度を取れ

次に、禁酒主義を徹底するために大切なことは、守りの姿勢をではなく、攻撃の態度を取ることである。「君、一杯やろう」と誘われた時、「今日は少し気分が悪いから…」などと言い訳をすれば、「それなら日本酒はだめだから、ワインならいいだろう」などと攻めかけられる。

しかし、「君、一杯やろう」と誘われた時、「僕は感じるところがあって、近頃、禁酒しま

した」とか、「僕はキリストを信仰して酒を止めた。君もやってみなさい、禁酒に限るよ」というふうに、一歩踏み出して進撃するならば、向うでも酒の悪い位は心の奥で分かっているから、「そうか、それはよく思い切ってやったね。僕は実に恥じ入るよ」と、下手に出て、あなたに敬意を払い、あなたの言うところを謹聴するようになるのは必然である。

私たちは決して受け身になってはならない。絶えず進撃の態度をとり、人を禁酒に導き、またこれをキリストに連れ来ることを努めなければならない。これは、自らの禁酒の主義を防衛する最上の方法であり、同時にまた世の多くの人々に、大いなる功徳を及ぼす道である。

（五）　救世軍に加入すべし

最後に今一つ忘れてならないのは、同主義同精神の人々と団結し、互いに相励まし、相助けるようにすることである。

ある時、禁酒主義の青年団体に一人の酒酔いがやって来た。「ここは禁酒主義の人ばかり集まるところであるが、あなたは何か思い違いで来たのではないか」と尋ねると、「なるほど、私は酒に酔っている。しかし、酒は悪いものだと思うから、たった今、禁酒の誓約書に記名したところである。以後、私はまだ一滴の酒も飲んでいない。私は、今、酒に酔っているが、この上は飲みたくないから、こうして訪ねて来たのである」と言ったそうである。

すなわち、この酒酔いは自分がいかにも意気地のない酒飲みであることを萬々承知しながら、せめて同志の禁酒家の後ろ楯により、以後は厳正禁酒の人になろうと心がけたものと見える。「団結は力である」、「二人は一人にまさる」。私たちは同志の人々と結託して、自ら守り、また他人を誘導することに努めなければならない。それには、あなた方が各地にある禁酒会に加入することはとても良いことである。

私たちの救世軍は、厳重なる禁酒主義をとって立つところの宗教団体である。酒を飲むものはその士官になれないばかりか、その一兵士たることさえ許されない厳重な禁酒の団体である。

私たちは、この書物の読者が一人残らず禁酒を実行する人となり、かつ、キリストを信仰して罪より救われるに至らんことを切に祈るものである。

Ⅲ　復活の人

大正四年二月二十三日発行
著作兼発行者　山室　軍平

一　根岸の御前（大酒の癖から救われた人の話）

（一）　日本の「再生の人」

英国のハロルド・ペグビィという人が、自らロンドンの貧民窟に入り、救世軍の導きにより罪を悔い改めて、キリストに救われ、今は人助けのために働いている刑状持、博徒、無頼漢、大酒家等の事を記した「再生の人」という書物は、多数の人に愛読された。

しかし、これは英国のロンドンにおいてだけ起こった出来事ではなく、それと似たような改心の事実は、わが日本にもある。キリストの救いはわが日本の救世軍の中にも、多くの不思議を現しているのである。

そこで、私は今、世に三道楽という、いわゆる飲む、買う、打つ、の三つの代表的悪習よ

り救われた人物を一人づつあげて、わが日本における「再生の人」または「復活の人」の事を、紹介したいと思う。

順序として、先ず多年飲酒の悪癖に苦しんだあだ名「根岸の御前」という人から始める。ただし、何れも現在の実話であるから、本名は遠慮して、すべて仮名を用いることにする。

（二）　酒造家の息子

榊節造は和歌山県の出身で、明治元年の生まれである。父は酒造を業としていた。あえて酒好きというわけではないが、少し心配事でもあると無茶な飲み方をする。一升も二升も飲み、飲み出したら一週間でも二週間でも飲む。随分、非常な大酒であった。

時々、酔った勢いで妻子を家から外に叩き出し、夜中、寒風に晒させたこともある。とうとう五十余歳で酒のために命を取られた。節造はこういう家庭に生まれ、年中酒の匂いを嗅

いで育ったのであるが、小さい時から飲んだわけではない。

十七八歳の頃から酒に親しんだが、師範学校に入学して寄宿舎生活をしている間は、さほど多く飲む機会はなかった。師範学校を卒業し、上京したのが二十四歳の時であった。同県出身の代議士に某新聞社に入れてもらい、夜は神田の法律学校で経済学を学び、社からは株式の方の記者に任じられた。かくて兜町から蠣殻町の辺に出入りするようになり、小金が儲かるようになり、大いに酒を飲み出した。

（三）　恐ろしい潜在意識

小さい時から酒の匂いの中に育ち、父の大酒を見ながら成人した彼は、二十三四歳の当時まで、さほど酒癖が悪いという風にも見えなかったのに、一旦小金が儲かり出し、また自分で自由が叶うようになると、たちまち大変な酒好きの性質を現した。

しかも、その酒癖が賑やかで、自分一人で飲むのではなく、人にも飲ませるのである。飲んで、あらゆる種類の道楽に浮身をやつすようになった。芸娼妓に戯れる、幇間の贔屓をし、相撲の贔屓をし、役者の贔屓をし、浪花節に肩を入れ、随分と思い切った真似をしていた。

いつまでも同じ新聞社に勤めていたのではなく、一つの社から他の社に転じたが、その担任する方面に変わりがないので、彼はやはり前と同じような生活を繰り返していたのである。

（四）　不品行と無駄使い

二十八歳の時に結婚した。妻は夫思いの婦人であったが、二人に子はなかった。そこで、節造はそれを口実に妾を置くことになった。彼は根岸の辺に住んでいた。毎日、自分で飲んでまわるだけでなく、近所の誰彼を連れて来ては飲ませ、またこちらから酒を持参で、飲ませて歩くというような始末だった。

（五）　「根岸の御前」とおだてられ

彼が、このように多分の金をかけて酒を飲んだ結果、勝ち得たのはただ「根岸の御前」というあだ名だけであった。彼の懐を当てに酒を飲みたい連中は、彼を「根岸の御前」とおだて、機嫌をとっては飲ましてもらっていた。

彼も時として、自分の酒癖を苦にして、禁酒をしようと決心したことも一度ならずあった。ある時、彼はいよいよ禁酒の決心をして禁酒会に入会し、会員の徽章を時計の鎖にぶら下げていたが、一週間と経たないうちに誓約を破って酒を飲んだ。果ては、金が足りないために、その時計を禁酒会員の徽章付のまま質に入れ、流してしまった。

（六）　一枚の「ときのこえ」

節造が初めて救世軍に出会ったのは、明治三十六年のことであった。一日彼は一友人と亀戸で酒を飲み、一緒に散歩して浅草公園に遊んだ。ぶらぶらしている所へ、一人の救世軍人が、その機関紙「ときのこえ」を売りに来た。

勧められるままに一枚買い求め、読んで見ると、そこに一人の酒飲みの改心した身の上話が出ている。何だか自分のことでも書いてあるような心持ちがして、変な気になったため、友人に向かって「今日はもう飲むことを止めて帰ろう」と言い、各々家路に就いた。

その翌日、救世軍本営を訪ね、「ときのこえ」の購読を申込み、別に「平民の福音」と「軍令及び軍律兵士の巻」との二冊を買い求めた。その結果、キリストの救いを受けたわけではないが、少なくとも人間以上に畏れ敬う神のあることに気づき、その前に身を慎もうという、これまでにない新しい動機ができ、半年間、全く好きな酒を止めることができた。

（七）　酔っぱらいの救世軍

しかし、彼の禁酒は半年にして破れた。救世軍の出版物は次々と買い求めて読み、人の顔さえ見れば救世軍の話をし、ことに酒に酔うと、救世軍の講釈を始めた。最も明治四十四年、「ブース大将伝」を読んで新たな刺激を受け、今一度禁酒を誓ったが、一年程にして破れた。

節造が、その頃、自分では酒を飲むくせに、人の顔さえ見れば救世軍の講釈をするので、その言葉と行いとの矛盾をあざけり、「酔っぱらいの救世軍」と名付けて彼を笑う者もあった。人が心には道を慕いながら、未だそれだけの実行に至らない過度の時代には、往々にしてそういう経験をすることもある。

私たちは、徒にそういう境涯にある人々の矛盾の生活をとがめてはならない。むしろ、その胸中に点ぜられた小さな霊火を煽り、これを燃え上がらせ、その凡ての罪と穢れを焼き尽くすまで、力を尽くすべきである。

（八）　途方にくれた友人

彼の友人に、芸者を身請けして同棲する者があった。金がなくなったと見ると、女の両親は娘を引き戻して、今一度泥水稼業をさせようとし、女もその気であったが、表面上はそうでないように振る舞っていた。彼の友人は非常に煩悶し、せっかく同棲した婦人を今一度芸者にするようでは、男が立たない、いっそ死んだ方がましだと言って、女を連れて待合を泊り歩いては苦悶していた。

そこで節造は、手元にあった「日本に於けるブース大将」を携え、その友人を待合に訪ね、女と別々にして忠告を試みた。すると、友人は悟るところがあり、間もなくその女との関係を断ち、後に別の婦人を迎えて幸福な家庭をつくり、今は二人の子どもをもうけている。

後に、その友人は、「僕は、あの夜に君が置いていった書物を読んで、感動して涙の落ちるのを禁じ得なかった。僕はその力であの婦人との関係を断ち、誤りなく身の処置をすることが出来たのである」と、彼に語ったそうである。

「酔っぱらいの救世軍」は、このように友人に善良な感化を与えたのである。しかし、彼自らは、なお依然として、一個の飲酒の奴隷たることを免れなかったのである。

（九）　救世軍の一下士官

ある日、「ときのこえ」を読んでいると、自分の知人で、区役所に勤める荒川某という者が救世軍に入って、その下士官に任じられているという記事を見た。ならば、その知人に案内してもらって、救世軍に加わるのが良いと思って、彼から、種々救世軍の話を聞いてみたが、「こういう話を聞いて見ると、俺なんかは、まだ人間になっていないようだ」と妻に述懐していた。

そのうちに、彼の家に女中を雇い入れた。その女中が、台所の隅でお祈りのような真似をし、賛美歌のようなものを歌いながら、仕事をする様子から、「お前はキリスト教徒か」と聞くと、「はい、救世軍の兵士であります」と答える。上野広小路の病院小隊に属しているとのことであった。

（一〇）　救世軍病院の巡回救護

その女中は続けて、「私はリューマチを患い、寝付いたままで動くことができない状態で、医者に診てもらう伝手もなく困っていると、救世軍病院の巡回救護の方々が来てくれました。巡回救護というのは、医者や看護師の方が、貧乏人一軒一軒を訪ね、病人を見つけて親切に手当をしてくれるのです。」

「私は、その方々に助けられて、病気が少し良くなると病院に通い、そこで霊魂の救いの話を聞き、キリストの救いを受け、身体と霊魂の両方を癒していただいたのです」と言う。節造は、ここにも自分を救世軍に引き寄せる因縁がからまっていることを感じたのである。

（一一）　青年会館の大集会

まもなく彼は、その女中に案内され、神田の青年会館における救世軍の特別集会に出席した。これは、某外国士官の送別会であった。

会の終りに「今晩から決心して罪より救われたいと願う者は、前に進み出て祈りなさい」という勧めがあった。節造も進み出て、悔い改めの座にひざまずいた。そこで、一士官の丁寧な導きを受け、罪を悔い改めてキリストを信仰し、神に祈ってその救いを蒙ったのである。

このようにして、多年キリストの救いの外側を、ぐるぐると回っていた彼は、この夜、終にその恵みの門内に足を踏み込むこととなった。彼の罪は赦され、その心は変化して、この時から、彼は全く新しい生涯に入ることができたのである。

（一二）　楽しんで禁酒ができる

救いを受けて後の彼は、これまでのように酒を飲まないだけでなく、酒の匂いを嗅ぐのも

嫌になった。窮屈な思いをして酒を我慢するのではなく、全く酒が嫌いになったのである。意地や辛抱で禁酒するのでなく、楽しんで禁酒することができるようになったのである。

彼は以前にも時々酒を止めていたことはあったが、タバコは一度も止めることができなかったが、この時から、その好きなタバコさえ全く嫌になってしまったのである。キリストを信仰した結果、これまでに経験したことのない幸福感と安心を楽しむようになったのである。

（一三）　生活上における宗教

酒飲みの節造が酒嫌いになった結果は、先ず一番にその生活の上に影響して来た。彼は近所の二軒の酒屋に多額の支払いをしていたのが、最近は、同じ酒屋へ醤油や塩代だけを払っているということである。

近頃の彼は、毎日タバコ一箱と酒一合分の金額を貯金して、今更のように、神を知らない

時代の愚かな生活と、今日の締りのある生活を比べて、宗教の力の広大なことを感謝しているという。

宗教を、実生活と縁の遠い、迂闊なもののように考えてはいけない。宗教が家庭に、また日常生活に入り込んでこそ、本当に幸せな世渡りができるのである。節造の妻が、夫の行いの変化を見て、驚き、喜び、まもなく救世軍の信仰に入ったのである。

（一四）　怠け者が稼ぎ人になる

節造が酒を飲んでいる最中は、いわゆるはしご酒で、三日も飲んで回っては家に帰って、布団を被って寝てしまうので、その勤め先では名題の怠け者で通っていたが、その後の彼は同じ人かといぶかるほどの勉強家になった。

健康の上からも、飲んでいた間は度々病床の人となり、寝ている時は悪い夢を見て冷や汗

をかくというような不快を極めたが、酒を止めて後の今は目に見えて丈夫になった。

以前寄って来ては飲ませてもらった連中には、善く言わない者もあるらしいけれど、それは仕方ないとして、その他の人々は皆、彼の品性の変化の大きさに感嘆しないものはない。家の妻、新聞社の社長は言うまでもなく、彼と出会う者が、これを感心しているのを見れば、それで満足しなければならないと思う。

（一五）　他人を救うために働く

救われた彼は、他人を救うために働き始めた。自分が、以前酔っぱらいの生活をしていた居住地の付近で、伝道を開始したのである。夜と日曜日には付近の人々にキリストの福音を伝えているのであるが、その導きにより、同じ信仰に志すものもあった。

最近では、愚連隊の隊長であった一不良青年が改心し、真面目な生活を始めた。また、一

人の婦人は、産婆試験に落第し、悲観して心得違いをしようとしていた所を、彼の路傍演説に通りかかり、それから救いを求め、新しい希望を持つようになった。

二　初春亭正子（放蕩の行いより救われた人の話）

（一）　石部金吉もあてにならない

世間では堅い者の喩えに、石を引き、堅気な人間のことを「石部金吉」などと言う。しかし、その固いものの代表とも見られる石でさえ、置く場所によっては、容易にその影響を受けるものである。

まして、物に触れ、事に応じて、心を動かしやすい人間が、その身を置く周囲の境遇によって、大きな感化、影響を受けるのは、いっこうに不思議なことではない。私どもは、世の不品行な両親から生まれ、または、放逸な風俗の中に成長する少年の行く末を考える時、ことにこの感想を深くするのである。

（二）　親を見習っての道楽

九鬼兼太郎は、十五の年から茶屋酒の味を覚え、親の目を盗んでは道楽をしたのであるが、家に帰って親から小言を言われると、いつでも言い訳をして、「私ばかり叱られるのは、割に合わない」と言っていた。

これは、彼が親たちにも品行上の弱点があることを知って、自分ばかりが咎められるはずがないと思ったからである。彼の父は、苦労して八百屋物問屋になり、最初の頃は堅気にやっていたが、生計が豊かになるに連れて、女狂いを初め、その妾の数は五人に達したという。彼の母は、結婚するまで問題のある挙動があったらしい。

（三）　金を盗んで買い食い

彼は小さい時から買い食いすることが好きで、家から金を盗み出しては、学校の行き帰りに天ぷらの立ち食いなどをしていた。始めは一銭か二銭、後には十銭、二十銭、ある時は五十銭を掠めていた。

彼は十三歳で学校を退学し、父の稼業を手伝うことになったが、京極方面へ使いに行くうち、講談、落語、芝居をのぞくことを覚え、後には、金をごまかして、毎日、そういう場所へ出入りするようになった。

（四）　遊郭の御用聞き

初めて悪所通いをしたのは、彼が十五の時である。人はその見る所、聞く所によって心を動かすものである。今の日本には、都会に遊郭が設けられ、人に淫行を促す仕掛けになっている。京都、大阪などでは、これを市中目抜き通りに置いてあるので、大なる誘惑である。

兼太郎の場合、その危険極まる誘惑の場所へ、御用聞きに行くから堪らない。彼は間のなくその辺りに徘徊する艶かしい婦人を慕い、廓の内に豪遊をする遊治郎を羨ましく思うようになった。彼はまだ十五歳で、早くも放蕩の行いにその身を委ねることになったのである。

私たちは、一方に大っぴらな公娼のようなものを設け、人の淫行を挑発しておきながら、一方に国民の品性が高くなることを求め、その善良な風俗の進歩を願うのは、今の社会制度に大きな欠陥があることを認めなければならない。

（五）　十七日間の居続け

悪所通いを始めた当座は、宵の内に家へ帰っていたが、後には廓に泊まって来る夜も多くなった。十六歳の時、余りに帳面をごまかしたため、自分でも居心地が悪くなり、乾物屋に奉公して、一年ばかり真面目に日を過ごした。

十七の年に、一旦帰宅し、またぞろ大変なお金を使ったため、家を追われて父の妾のところに預けられた。この父の妾は祇園町で湯屋を営業しており、いかがわしい婦人が来るので、これによって受ける感化は想像するに難くない。その家にいるうち、またひどい放蕩をして、ある時は、続けざまに十七日間、あるお茶屋に登ったきり、居続けたようなことがあった。

（六）　金庫破り

彼は、父が昼間いる八百屋物市場に備え付けてある金庫の暗号を知っているから、その合鍵を作って、折々金を盗み出していた。当時、京都に元刑事で探偵社を経営するものがあったので、彼の父は、そこに一切の調査を依頼した。

その結果、最初からの彼の行跡がことごとく露見し、彼は探偵とその部下に捕えられて、父の手に引き渡された。彼の父は、今はその叔父の張物職を業とする者に預けたが、そこで彼は病気になって入院、全快すると、今一度、父が引き取ることとなった。

（七）　喜劇役者となる

その頃までの彼は、専ら女狂いと、酒とに身を持ち崩していたのであるが、彼は終に今一つの悪事にも手を染めるようになった。即ち、丁半を争うことを学び、果ては歴々の博奕宿に足を運ぶようになった。彼が十八歳の時のことである。さすがの父もこれには愛想をつかし、彼に勘当を申し渡した。

彼はこれをいいことに、俄師の群れに投じ、喜劇役者の一人となった。こういう者の仲間では、余計に道楽をした者ほど幅が利くので、その方から言えば、兼太郎程放蕩の経験を有するものはなかった。ここにおいて彼は、たちまちのうちに好い顔になった。

初春亭正子という芸名で、彼は京極の大虎座と、朝日座との喜劇に出演した。今も。三宅八幡にその当時の喜劇一座から奉納した番附の額が掲げてあり、初春亭正子の名を読むことができる。これは堕落の極、俄師の群れに投じていた当時を語る記念である。

（八）　素人の婦人

彼が俄師の仲間に入って興行したのは、約八か月間のことであった。その間も彼は、折々母を訪ねては、金なり、米なりを無心していた。ある時は、朋輩の金を使い込んで、母のヘソクリをしぼり出したこともある。

彼は折々。師匠に連れられて、贔屓客の前に出ると、そこには芸者だの、舞妓だのがたくさん居て、大乱痴気騒ぎを演じるのが常である。彼は同じ放蕩での上には上があることを知り、ますます良からぬ道に深入りするのであった。

その後にまた、彼の詫びが叶って家に帰り、金を使っては居づらくなって、大阪に逐電したことも二度ほどあったが、二度目に金がなくなって大阪から帰る時、風邪をひいて、それが原因で肋膜を患って、一年ばかり苦しんだ。

一時は医者から見放されたが、幸いにして回復した。その頃から彼の不品行は念が入って

きて、素人の婦人をなぐさみ者にするようになり、果ては、ある居酒屋の預かり娘と、同じ居酒屋を手伝っていた人妻と、いっぺんに関係して不義や快楽に耽るようになった。

（九）　淀川に入水しようとする

彼は依然としてお茶屋に頻繁に通っていたので、ある時、ひとりの娼妓と深い中になり、相談の上、廓を逃げ出した。しかし、別段身の落ち着き所もないのであるから、いっそ情死して果てようと覚悟を決め、淀川に身を投げて死ぬつもりであった。

それにしても少し金を工面したいと、途中で以前の俄師を訪ねると、師匠の妻は気味悪く思い、使いを彼の家に走らせたので、事が直ちに発覚した。そうして、女には花代を添えて廓に帰し、彼はまた家に引き取られた。

その後、彼はまた家を逃れて、名古屋に行って遊廓にしけ込み、一文無しになって京都に

帰って来たようなこともあった。

（一〇）　母の寿命を縮める

彼の母は、夫が他の婦人を蓄えて、その方に泊りがちで、いつも心寂しい日を送っており、極道ではあるが、彼を力に思い、これを保護する甲斐もなく、彼の放蕩は益々激しくなった。それを見て憔悴し、病にかかり、五十二歳にして心臓病で亡くなった。

彼の父は、彼の行く末を案じ、適当な女性を妻に持たせれば、自然とひどい道楽も収まるのではないかと取り計らい、いわゆる内縁の妻と一緒に住まわせることにしたが、それさえ一週間と続かなかった。またまた外に野良歩きを始め、妻の心を痛めるより外に、何の効能もなかったのである。

（一一）　真夜中に良心の声

明治四十三年十月、彼は関係している居酒屋の預かり娘のもとを訪ね、一緒に酒を飲んだ後、祇園の遊廓に繰り込んで、数人の婦人をあげて陽気に飲んだ挙句、彼らを引率して四条大橋の辺りに喜劇を見物に出かけた。かくて夜も更けて、廓に帰って飲み直し、そこに泊まった夜の二時頃のことである。

朝寝坊の彼は、不思議にその眠りより覚めた。そして、これまでの馬鹿らしい生活のこと、親不孝のこと、現在の不始末、さては行く末の事など、頻りに胸に浮かんで来て、どうしても寝られなくなった。

起き直って、静かに思案をすればする程、何のために今日のような世渡りをしてきたのか、自分でもその理由が分からず、こんなことならいっそ死んだ方がましではないかという気になった。

さらに、こういう時には救世軍に行って相談するのが一番だということも考えた。彼は救世軍について詳しくは知らなかったが、四条富小路に救世軍のあることは、幾度もその前を通って知っていた。

また、二三年前に、五条のところで救世軍の説教に通りかかり、姦淫した女をキリストが赦されたという話を、五分ばかり立ち聞きしたことがあった。彼の胸中に、「こんな時には救世軍に行け、救世軍の外にお前を助けてくれるものはないぞ」という声が聞こえたのは、不思議という外ない。

（一二）　叩けよ、さらば開かれん

何分、真夜中のことであるから、彼はそこに座ったまま、夜の明けるのを待ち、未明に自転車を飛ばして救世軍京都小隊へと駆けつけた。また寝ている小隊長を起こし、「私は悪いことをしたのです、懺悔に来ました、助けて下さい」と言う。

小隊長は起き出て、彼を会館に連れて行き、「一体あなたは、どういう悪い事をしたのですか」と訊ねると、彼は自分のこれまでの道楽不身持ちのことから、親不孝の顛末を具に語り、「私のようなものでも救われますか」と尋ねる。

小隊長は、イエス・キリストの十字架の意味を説明し、「救い主、キリストはこうして、十字架にかかってまでも、世界万民の罪を贖い給うたのであるから、あなたが唯悔い改めて信仰さえすれば、必ずその罪を赦されて、霊魂を入れ替えられるに相違ない。どんなに罪の深い人でも、または心配苦労のある人でも、キリストを信仰して、救われなかった例がない。」

「あなたも、今真面目にこれまでの悪しき行いを悔い改め、キリストにすがれば、自分の力ではない、神様の力によって救われ、今から神様の家族の一人としていただくことができる。」という教えを聞いて、彼は、その忠告に従い、その場にひざまずいて、心からその山のような罪を悔い改め、キリストの救いを求めると、不思議にも、その時彼は霊魂を入れ替えられて、新しい人間になったという自覚を得たのである。

（一三）　神の家族となる

兼太郎は嬉し涙を拭いながら、何回も士官の丁寧な導きを感謝し、「これから帰宅して、妻やその他の者に見せるため、今朝ここで私がキリストの救いを受けたという証明書を書いて欲しい」というと、小隊長は名刺の裏に「九鬼兼太郎氏、今朝神の前にて前非を悔い、神の家族となりたることを証す」と認めて捺印して渡してやった。

家に着くや否や、「おれは今日から神様の家族になったのだ」と叫ぶと、その妻は不機嫌に、「毎日毎晩出歩いて、言い訳がないものだから、大声に気違いじみたことを怒鳴って帰って来るなんて、人をバカにするのも程がある」という。

兼太郎は、今朝救世軍に行って改心した顛末を語り、今後はこれまでと違った行いをするから、今までの不都合を許してくれるよう、頭を下げて詫びをしたが、妻は相手にしてはくれない。風変わりな狂言をするものだと考えていたのである。

（一四）　不義の関係を断つ

市場に出て、その日の仕事を済まし、夜は救世軍に行って朝の話の続きを聞き、翌日はこれまで関係していた居酒屋の娘との縁を切りたいと思い、訪ねて行ったが、どうも話しづらいので、そのまま帰って来た。

三日目に、今一度元気を出してその娘を訪ね、かねて小隊長からもらっておいた証明書を示し、真面目に別れ話を持ち出すと、先方はびっくりした。後に、その女の母が、「娘は妊娠しているから金を出せ」というようなことを言ってきたが、小隊長と二人で談判に言って、その処置を済ました。別にゴロツキが一人ユスリに来たが、小隊長が引き取って相手になり、ゴロツキも取り付くしまがなく、帰って行った。

その他に関係のあった婦人は、いずれも醜業を商売とするもの故、こちらから寄り付かなければ、自から縁が切れるようになっていたのである。

（一五）　救世軍に行く証明書

兼太郎は今更のように、これまで自分が妻を粗末にしていた不都合を強く感じるようになった。いろいろと詫びを言うが、妻は一向にその言う事を信じない。毎晩、救世軍に行くのさえ、やはり不潔な所へでも通うように考え、嫌味を言うのである。

兼太郎は、妻の安心を買うために一冊の帳面を作り、それに毎晩家を出た時刻をつけさせ、それから救世軍に着いた時刻と、また救世軍から出た時刻とを書き込んでもらった。さすがの妻も、初めてその行いの変化を信用するようになった。

妻さえそれほど疑った位であるから、近所の人たちは、長い間、誰一人として彼の改心を信用するものはなく、そんな話が出るたびに、皆あざ笑って、「何、兼太郎が改心したとか、大嘘である。あれが堅気になろうものなら、おれは逆立ちして町内中を歩いてみせる」といった評判をしていたのである。

（一六）　酒屋の提灯を見て祈る

しかしながら、彼の救われた事は実際の事実であった。それまで道楽不身持ちをしていた彼が、その当日から全く不品行を辞め、酒も飲まねば、博奕も打たず、一心不乱に家業に精を出す辛抱人に変わったのである。

最も、彼自身としては、神の助けが自分の上にあることを信じながらも、油断は大敵であると思う故、周囲から襲って来る誘惑を厳重に警戒した。一例を上げれば、商売に出て外を通行する際、「酒」という字の提灯を見ると、そこまで行かない先から、「ああ神様、無事にそこを通らせてください」と祈り、通ってしまうと、「ああ神様、無事に通してくれて有難うございます」と感謝する位に心がけた。

また、彼は小さい時から、婦人の欲に迷ったのであるから、救いを受けて後は、一切遊廓の所在地に近づかないようにして、もし商売上で余儀なくその方角に出かける時は、心の中に絶えず神の助けを祈りつつ、大急ぎで通ってしまうように注意したのである。

（一七）　救世軍の結婚式

彼は、毎日の仕事に身を入れて、時間の都合が出来次第、直ぐに救世軍に出かける。ほとんど毎日のように救世軍を訪ねて、その集りに出席し、聖書の講釈を聞き、祈りをし、人の勧めを受け、また自分の体験ばなしなどをして、その信仰を養うことに努めた。

そのうちに、彼の妻もその志に感じ、後には一緒に救世軍の集りに出て、信仰の道に傾くようになった。終には救いを受けて、その兵士になった。

そして、法律上の手続きを踏んでいない内縁関係だったので、これはどうしても新しい信仰の光によって、今一度、正式に結婚式を挙げる方が良いと判断された。そして、区役所に行って、妻の入籍の手続きを済ませ、救世軍の士官に願って、改めて救世軍の結婚式を挙行したのである。

（一八）　同業者の評判

ある時、同業者が寄って何かの会合をする際、彼が人から勧める盃を手に取らないのを見て、その無礼を怒り、また、その強情を嘲る者があった。その中の一人が弁護して、「兼太郎君は救世軍に入ってから、一言も嘘をつかなくなった。これは感心すべきことではないか」と言うと、「なるほど、そう言えばそうだなあ」と、一座が彼の堅気な生活を賞賛するに至ったことがあった。

彼が、救世軍の仲間に加わって、早くも四年半に達した。彼のキリストを愛し、正しいことを好む心は日に日に成長進歩している。最もうるわしいのは彼と妻の間柄で、いわゆる共稼ぎで、水入らずの楽しい生活を営んでいるのである。

（一九）　徳は得なり、理は利なり

彼は今、父及び弟の三人にて、合名会社にて八百屋物を取り扱っている。彼が月々受ける僅かな給料から、倹約して貯蓄した金額だけでも相当な額に達したのである。いわゆる「徳は得である。」「理は利である。」「先ず神の国とその義とを求める者」に、神が物質上の恵みを施し給うという聖書の約束は、いつの代にも変わらぬ真実である。

放蕩していた頃の彼は、度々病気になり、肋膜を患った時は到底助からないと言われたが、キリストを信仰して以来、非常に健康になった。いわゆる「救いは健康を与える」とはこのことである。

彼が京都小隊に属する一軍人として、会館や野戦にて、その体験に基づく神の恵みの証言を述べる時、これを聞いて罪を悔い、同じ救いを求める人々が多く起こっている。また、首都における救世軍人の活動ぶりを見て、京都に帰り、その地の運動の進歩発展を助けている。

聖書に「キリストを受け、その名を信ぜし者には、力を賜いてこれを神の子となせり。かかる人は血筋によるに非らず、欲によるに非らず、人の心によるに非ず、ただ神によって生まれしなり」とある。

神が如何に親からの遺伝が悪く、育った環境の良くない人物をも、見事に罪悪の中から救ったかは、この九鬼兼太郎の半生の歴史を見る人には、難なく得心のできることを信じる。

三　お狂乱の利三郎（博徒の群れより救われた人の話）

（一）　一連隊の悪魔

昔、一連隊の悪魔に憑かれた男があり、手枷足枷をかけて繋いだが、それを断ち切って暴れまわり、誰もそれを制することができなかった。果ては墓場に行って、そこを棲家として、石でわが身を傷つけるのを、イエスが通りかかって、これを憐れみ、その鬼を追い出すと、その男はたちまち羊のように柔和な人物になり、人々が驚いたという話がある。

それと全く似た事実を、今日の東京の真ん中に見出すのは、とても興味あることである。京橋区八丁堀中町の辺に、西田熊吉という道具屋があって、角屋敷に住んでいたため、通称「角熊」として知られていた。

京橋区古物商の副取締をしたこともあり、酒は飲むけれど博奕はうたない。年を取って後は、娼妓を身請けして妾にしたことはあっても、若い間はどちらかというと、まず堅気に稼いだ方だった。

（二）　コレラで死にたい

彼に五人の子が生まれたが、三人までは早く死んで、ただ二人の男の子だけ残った。兄の利三郎というのが、この物語の主人公で、後に、いわゆる「お狂乱の利三郎」である。彼は、七歳の時に母を亡くし、父親の手一つでわがままに育てられた。

小さい時からケンカ好きで、気性が荒く、「兄公」と呼ばない者には返事さえしなかった。手習い師匠の元に通っただけで、九歳の時に早くも奉公に出された。最初に行った乾物屋では、それでも足掛け三年の間辛抱したが、その家が潰れたために、今度は竈屋に奉公した。

それから、廻船問屋、蝙蝠傘屋、飾り屋、道具屋、ぬし屋、仕事師、薪屋、呉服屋、郵船外車の給仕等、十五六歳までの間に十数件の勤め先を変えた。そのうち塗師屋だけは約一年いたが、あとは大概二三か月で暇をとった。

呉服屋では寝小便をするといって鼠の黒焼きを飲まされ、それが嫌さで逃げ出した。仕事師の家ではそこの娘の芝居見物に付き添ううち、すっかり芝居好きになり、主人の目を盗んで立見をしたりするから、とうとう暇を出された。

面目ないので横浜に行き、折からコレラが流行している最中で、いっそ悪疫に取り憑かれて死にたいと思い、わざと氷水を飲んだり、天ぷらを食べたりして、あらゆる不養生をしてみたが、お腹も痛くならず、失望して帰京した。その他の奉公先は、お祭りに浮かれて帰ることを忘れたために、しくじった等が多かった。

（三）「お狂乱」の由来

「お狂乱」というあだ名がついたのは、彼が十六七際の頃からだった。その理由は、彼が近所に店開きだの、興行物がある時、いつも暴れ込んでは大騒ぎをして、また祭礼の時など、自分に渡りをつけなければ神輿を出させないとか、灯籠も立てさせないとか、山車を曳かせないとか言って、皆に迷惑をかける。

たまたま思わぬ人から殴られでもすると、直ぐに出直して行っていっそうひどい暴れ方をする。「あれの身体こそ不死身というものであろう」と評判にされるほど、懲りずに暴れまわるので、遂に誰も彼を正気の人間とみなす者がなくなり、これに「お狂乱」というあだ名をつけられることになったのである。

ある時、彼の妹が死んだ。すると、彼はお寺に行って、坊さんをゆすり、寺へ金を納める代わりに先方から金を出させて帰って来た。またその姉の死んだ時には、石碑を建てると言って、近所の衆から喜捨を求め、石碑は建てないで酒を飲んだ。

ある時は、芝居の最中に舞台に躍り上がって役者を打ち倒し、見物人を騒がせたことがある。また、ある時は築地の釣船神社に願かけをしても聴いてもらえなかったと言って、神殿

に上がって太鼓を踏み破り、神主を脅してその毎月六日の縁日を止めさせてしまったこともある。彼は本当に「お狂乱」と呼ばれての仕方のないような毎日を送っていたのである。

（四）　博徒の群れに投じる

彼は暫くの間、執達吏の下働きをしたことがあった。つまり、執達吏の差押えた品を競売にかける役割を務めたのである。その頃の執達吏は、随分と無法なことをしたもので、現に彼が本郷真砂町で、元旗本が営んでいるある下宿屋へ出かけた時、二人の若い娘の着ている物を剥ぎ取りにかかり、娘はその黄八丈の前掛けだけは亡きお祖母さんの形見であるからというと、その代わりに仏壇の阿弥陀仏を持って帰ったという。

また、蠣殻町のある魚屋に競売に行った時は、そのやり方が余りに無慈悲なので、亭主が向う鉢巻をして、研ぎ澄ました出刃包丁を振り回し、役人は皆青くなって逃げ出したこともあった。

利三郎は二十歳の頃から博徒の群れに交わり、競売でカネ回りが良いから、当時築地にあった南京町に出かけて、丁半をやったが、金を取られるばかりで、少しも儲けたことがない。博奕に負けた時は、勝った連中と示し合せ、父親の道具店へ客のような顔をして来てもらい、そこらの品物を言い値で買う振りをして、実は彼の借金の埋草に取って行かせていた。

しばらくこんな真似をするうちに、父親も勘付いて大層腹を立て、彼の勘当を申し渡すだけでなく、執達吏の方にも掛けあって、彼を解雇させてしまった。

（五）　石川島の監獄

かくて彼は仕事から離れ、家からは追い出され、身の置きどころがないため、ある親戚の家に転がり込んでいる間に、ある日、入舟町の四軒茶屋で博奕を打っているところへ、巡査に踏み込まれ、罰金五円、懲役一月という宣告を受けて、石川島の監獄へ入れられた。

そこで、彼は毎日、自分と似たような悪漢無頼の徒と交わり、これまで知らなかった悪い事に修行を積むだけであった。当時の監獄は、いかにも不完全極まるもので、彼は博奕館と言われる博徒のみ二百人も雑居する大牢の中に入れられた。そこから出かけては、今の月島を埋め立てるため泥土を担ぐのが日常の苦役であった。

（六）　無規律な牢屋

監獄には「でんごく者」と言って、牢名主のような者がおり、たいそう幅をきかせていた。在監人は外から差入れ物が届いた時など、一応そのままでんごく者に差し出し、その分前を取られた後でなければ、これを自分のものにすることができなかった。

また、毎日の月島埋立ての方には、同じ囚徒の中に役付という者がおり、配下の弁当でも草鞋でもその頭をはねていた。無理に重たいモッコを担がせては、それを運べない者から、弁当や草鞋の幾分かを取り上げるのである。

一か月石川島にいた彼は、前より余計念入りの悪党になって出て来た。家に帰っても父親が相手にしないので、「一辺臭い飯を食った身ではないか、この上は太く短く世を渡る外はない」と、自棄になって本当の博徒になろうと決心した。

彼は思い切って、遊び人の生活に入ったが、わざと親分を取らないで、自分一人で勝手なことをしていたのである。

（七）　二十二町の縄張り

そうする内に、鉄砲洲の啓造親分という者から、子分になってくれという申し入れがあり、明治三十二年七月、彼は一番後から入って、いきなり三十一人の遊び人の頭になり、啓造親分の手下となった。

しかし、遊び人ばかりを相手にしているのも面白味がないので、利三郎は更に壮士の仲間

に渡りをつけ、段々手を伸ばして暴れ出すと、啓造親分は持て余して途方にくれているのを、佃増という親分が見かねて、啓造の舎弟分という資格で、佃増の配下に属した。

そして、その四天王の一人として、入舟町が六か町、新栄町が五か町、新湊町五か町、本湊町が一か町、南八丁堀が三か町と、船松町と、都合二十二か町をその縄張りとして受け持つ身分となった。

（八）　合わせものは離れもの

その頃、彼は盛んに女狂いを始め、しきりに洲崎遊廓に通うので、親分が心配して問うと、「買いなじみの娼妓を女房にしてくれたら、おとなしくする」という。そこで親分が都合してその女を身請けしてやると、彼は喜んで同棲することになったが、いわゆる「合わせものは離れもの」である。彼らが一緒にいる日は決して長いものではなかった。

彼が博奕に負け、新栄町から船松町に引っ越して後のことである。佃の祭礼に行って丁半をやり、拾円の借りをこしらえて家に帰り、家内に向かって「お前は泥水家業をしていたのだから、以前の馴染みのどこかへ行って、拾円借りて来てくれ」と言うと、女は二時間ほどの間に金を整えて来た。

それから半月ほどの後、彼はまた参拾円の金が入用になり、「今一度どこかに行って工面をして来てくれ、一晩位泊って来てもいいから」と言うと、女は出て行った。しかし、今度は十日経っても帰って来なかったのである。

（九）　女房を他人に譲る

何日か経って、啓造親分の所から呼びに来たので行ってみると、刑事が銘仙の反物一反と、金参拾円と書いて紙包みを持って来ている。そして「お前の女房は今、神田の煉瓦屋の虎という博徒の所へいるが、聞けば、お前は女房を金の工面に出す時、泊まって来てもいいと言

ったそうではないか。そういう位なら、綺麗にその煉瓦屋の虎に譲ってはどうか」と言う。

そうすると親分も「貴様も女で銭儲けすると言われては男が立たないだろう。綺麗にやってしまえ」と相槌を打つので。外に挨拶の仕様もなく、離縁状を書いてもらい、その刑事に渡して、引き換えに反物と金を受け取ろうとすると、親分が「女房を金で売ったと言われては、お狂乱の顔にかかるではないか。反物は手札代わりに受け取ってもよいが、金は受け取るな」と言うので、金は受け取り損ね、ただ銘仙の反物一反と引き換えに、女房を人手に渡すこととなった。

（一〇）　巡査を斬って落人に

反物一反と引き換えに女房を人手に渡して後一か月ほど経って、彼は陸軍の特務曹長を勤めた人の未亡人と関係し、その家に入り浸りとなり、その財産を蕩尽した。

ある日。彼は博奕の間違いから、仲間とケンカをしているところへ、巡査がやって来て、彼を突き飛ばしたので、突き返すと尻餅をついた拍子に巡査の帯剣が抜けた。それを彼は手にとり、巡査の顔を斬り付けて逃げた。

佃増の親分は彼に忠告して、「貴様はまだ世間を見ないから、今度の事を機会に旅に出ろ」と言う。そこで彼は、特務曹長の未亡人を連れて落人になり、千葉から茨城の辺を流浪した。彼は至る所、その仲間から大事にされたが、少しの間も気を緩めることができないのは非常な苦痛であった。

また、彼の腹部には彫物がしているため、夏の暑い時にも胸を広げることもできず、また風呂に入っていても、人に見付からないように、熱くても外に出かねて、茹でダコのようになったことも数回あった。

上総の方に行っている時、彼が巡査を斬った事件は、案外軽い刑で、六月の懲役という欠席裁判であったと聞き、いつまでも日陰者でいるより、服役した方が気が楽で良いと思い、直ぐに帰京して京橋警察署に自首し、監獄に送られた。

ただし、彼の特務曹長の未亡人は、彼が入監中にその子分と手をとって逃げたので、彼は出獄後、自分の娘分ということにして、一緒にならせてやった。

（一一）　自由廃業の起こった頃

明治三十三年、娼妓の自由廃業ということが始まった時、閻魔の留というものと一緒に洲崎遊廓を助け、救世軍や新聞社を迫害する役を勤めた。しかし、洲崎遊廓では閻魔の留が十日の拘留になった時、充分な手当をしなかったので腹を立て、今度は救世軍の側に立ち、洲崎を脅して金を出させたのである。

ある日、兵隊が築地の方に行軍して来ると、利三郎は一杯機嫌で行軍の前に立ち、大手を広げて「手前達は何故俺に断らないで、ラッパなんか吹いて俺の縄張りを歩くのか」と怒鳴ると、兵隊は鉄砲で彼を殴った。すると、受持の少尉が押し止め、彼に向かって「俺は麻布谷町に住んでいるから、遊びに来い」と行って立ち去った。

利三郎は少尉を訪ねて行くと、少尉に気性が気に入られ、二人は友たちになってしまった。後、その少尉が日露戦役に従軍し、運拙く討ち死にをした。そのことを聞いた利三郎は、泣いて近所を一軒一軒訪ねて、「俺の旦那が死なれたのだから」と言って寄付を求め、それで坊さんに読経を頼んだという。

（一二）　雑誌記者を脅迫

彼は後、お秋という女と一緒になったが、その女と同棲している間に、また雑誌記者の妻と関係し、やがてその記者を訪ねて行って脅迫したのである。雑誌記者は、その妻に家を付けて彼の手に渡したのである。

これを知ったお秋は立腹し、大声をあげて騒ぐので、彼はそこにあったレンガでその顔を打つと、彼女の目に当たり、片目がつぶれてしまった。このお秋という女も、人妻であったのを博奕宿で知り合って一緒になったのであるから、自分の家具一切を添えて元の亭主に返

してやると、元の鞘に喜んで納まることになった。

また、彼の雑誌記者の女房は暫く一緒にいたが、遂に金参百円にて、満州大連へ酌婦に売り飛ばし、今は行方不明だということである。

（一三）　愚連隊の頭

お狂乱の利三郎という名は、その縄張りでは泣く子を黙らせる力があった。湯屋でも、芝居でも、見世物でも、金を払ったことはない、どこも無料で入らせるのである。

日露戦争後、日比谷の焼打ち事件に関係して、彼は予戒令を申し渡され、三年間、寄席や芝居に行ってはならない、酒も三合より多く飲んではならないなど、やかましく取り締まられた。近所の酒屋へは巡査が調べに行くので、わざと遠方の酒屋から買って来ては、たらふく飲んでいた。

後に電車焼打ちの時などは、その筋から頼まれて、壮士の行った先を見にやられたが、同類を罪に落とすようなものだと思い、その都度、わざと焼打ちのなさそうな方へ行って来ては、誰も見つからなかったような返事をしていた。

ある時、岸田宇三郎という者が、稲妻義団という不良青年の団体を組織し、種々の悪いことをしている話を聞いて、その仲間を尋ね出して荒らし回ると、一同降参して、彼を愚連隊二百余人の頭と崇めるようになった。

彼は、大威張りで、愚連隊の不良青年を指揮して暴れていると、警察から解散を頼まれ、自分が手を引くばかりか、宇三郎にも意見を言い、ある者は親元に返し、ある者は新聞配達に、またある者は活版屋の職工などに住み込ませた。

（一四）　木賃宿の無銭者

ある夜、彼が新富町から帰って来ると、九月末というのに、汚れたシャツ一枚で、麦わら帽子を被った文造という植木屋の息子が、「富川町の木賃宿にお袋と、妻と子と四人泊って、宿賃が溜まりました。この間から芋ばかり食っていて、今夜、金を払わないと追い出されるということで、困っていると、お袋がお狂乱さんに頼んだら何とかなるかも知れないと言うのでここまで来ました。どうか助けてください。」と言う。

彼は、よしよしと、今は金がないので、親分のところで借りてやろうと、文造を連れて、佃増親分の所へ出かけた。すると妾が出てきて、「お前さんはこの間も横浜へ行くと言って、五円持って帰って、横浜へは行かず飲んでしまったというではないか」と咎める。

そこへ親分も出てきて、「今夜はとても金を貸すことはできない、明日にしろ」と言う。彼は「今日ここに可哀想な人間を連れて来ているのだから、是非貸してくれ」と頼んだが、断られた。

（一五）　命がけで尽くした親分

ここに至って利三郎は非常に腹を立てた。「いやしくもお狂乱が、これ程までに頼んでいるのに、素気無くはねつける法があるものか。殊に親分のためには、一度ならず命を投げ出して尽くしたこともあるのに、人を踏みつけるにも程がある」と、下帯を解いて手の中に丸め、親分の顔に叩きつけて、そこを出た。

そうして知り合いの居酒屋へ飛び込み、文造に飲ませてやり、木挽町に行き、知人から壱円を借りて文造に渡し、自分の懐にあった僅かな金で牛めしを食わせて、帰らせた。かれこれする内に夜が更けて来たので、船松町に帰って寝たが、眠れない。夜通し悶々としながら明け方に至ったのである。

（一六）　人殺しの計画

夜が明け、朝から博奕に出かけたが、どうも面白くない。「今度博奕で捕まったら、三年の懲役を食らって、牢屋で死ぬ位が落ちだ。どうせ死ぬなら、あの忌々しい佃増の野郎を殺して、ひと思いに死んでやった方がましだ」と、金物屋へ行った大きなナイフを手に入れて来た。

その日は縁日で、鉄砲洲稲荷の辺は賑わっていた。夕方、中橋辺りをぶらぶらすると、そこに人だかりがしており、救世軍が説教をしている最中であった。聞くともなしに聞いていると、「これから南八丁堀の小隊へ帰って、集会をするから一緒に来なさい」という案内があった。

何の気なしについて行くと、「同じ徳利でも、酒を入れてある間は酒徳利だが、水で洗って醤油を入れれば醤油徳利となる。そのように、どんな酒飲みでも、博徒でも、キリストを信仰して救いを受ける時は、心を入れ替えられて、見違えるような善人になれる」と言う。

そこへ決心を促しに来た人があり、彼は思い切って誘われるがまま悔い改めの座に進み出た。「あなたは酒を飲みますか」、「飲みます」、「これからは止めますか」、「はい止めます」

というところから教えられ、天の神の恵みを祈り求めて、その晩から全く生まれ変わった人間になることを覚悟した。

（一七）　徹夜で小冊子を読む

救世軍ではいろいろと細かく信仰の道筋を教えた後、「改心者指針」という小冊子を彼に与えた。彼はそれを持って会館を出たが、よほど決心を固めてかからないと、折角始めた信仰が無駄になってしまうかも知れないと思い、宿所に帰る代わりに、聖路加病院の外に行き、その電灯の下で、例の「改心者指針」を読んでいた。

そこに、巡査が回って来て、「利三公、そんな所で何をしている」、「今晩から救世軍に入りましたので、その本を読んでいる所です」、「そんな所ではいけないよ」、「それじゃ旦那、あなたの所で読ませてください」、「それもよかろう」と、彼は巡査と築地橋の交番に行き、暫くその小冊子を読んだ。

その後、近所にいる子分の家に行って、皆寝ている傍に腰をおろして、電灯を点けて、独りでまた小冊子を読み続けた。子分が目を覚して、「何をしているのか」と問うと、「俺はキリスト教に入って真人間になる決心をしたのだ」、「そんなことは止めた方がいい」、「止めない、本気でやるつもりだ」と言い、朝まで寝ないでその小冊子を読んだ。

夜が明けて、飯も食わずに飛び出して日比谷公園に行き、椅子に腰掛けてなおも繰り返し、その小冊子を読み、三四回繰り返し読んで、ほぼキリストを信仰する道筋を得心することが出来た。

（一八）　正直の額に汗

それから救世軍を訪ね、「今から本気で稼ぐつもりだから、何でもいいから、仕事の世話をして下さい」と言うと、その小隊の会計をしている炭薪屋の笠井氏が、彼を使ってやろう

ということになった。

彼は「この辺は、私がこれまで散々悪いことをしていた所だから、働きにくい」と言うと、「以前のことをよく知っている人たちの中で、改心の実を示したら良いではないか」と言われ、彼も納得して、翌日から炭薪を積んだ荷車を引き、額に汗をして労働することとなった。

何しろ長い間、真面目な働きをしたことのない身体であるから、通常は堪えられそうもない労働を、神を信じる力に励まされて、快く続けているのは、ことに以前の彼を知る者にとっては感心して止まないところである。

彼は、八回監獄へ入れられたことがあり、拘留されたことは数知れない位である。そういう社会の持て余し者が、今は真面目に労働してその糧を得るようになったのは、不思議という外ないことである。

（一九）　汁粉屋と蕎麦屋

救われて後の彼は、その受けた救いを失わないよう、十二分な警戒を加えている。荷車を引いて外に出て、昼時になっても、彼は「酒飯」という看板のある所へは決して近寄らない。以前は一度も入ったことがなかった汁粉屋へ入って何か食べている。そうでなければ蕎麦屋へ入っている。

この間も、彼が荷車を引いていると、足場を掛けていた仕事師が、「お狂乱、荷車を引いて橋が上がれるか」と揶揄する。しかし彼は、小僧と二人で立派に重たい荷車を引き上げ、さっさとその得意先に送り届けた。

毎日荷車を引いて店を出ると、その辺りの若い衆が「ハレルヤ」とか「救世軍」とか言って挨拶をする。彼が言うには、「集会に出ることはとてもためになります。私は集会に出る度に、精神が引き締まってくるように覚えます」とのことである。彼は神の導きにより、一日は一日より、篤き信仰に入ろうと心がけて、必死に努めているのである。

（二〇）　警察官の嬉し涙

お狂乱が救世軍に入って一番楽になったのは、その辺りの警察官である。ある夜、火事の半鐘が鳴るので、彼が近所の交番に駆けつけ「火事はどこか」と尋ねると、そこにいた巡査が「利三郎ではないか、よく真面目な人間になってくれて有り難い」と、目に涙を湛えて喜んでくれた。「お陰で警察に用のない人間になりました。火事の火元を聞きに来る外は警察に用のない人間で、一生過ごさせていただくつもりです」と挨拶して別れたとのことである。

彼が理髪に行くと、「この正月は、お前がいないために芸人がなくて困っている、ちょっと出てきたらどうだ」と言われ、「出て行ってもいいが、人中に顔を出せば、どこへ行っても救世軍の話をしますよ」と言って笑った。私たちは、彼を救った神が。またよく彼を保つことを信じて、ひたすらに彼の前途に祝福を祈っているのである。

これまで述べてきた、根岸の御前が酒から救われた話、初春亭正子の放蕩から救われた話、最後にお狂乱の利三郎が博奕から救われた話を考えるにつけても、自分がこの救いの力によ

って「復活の人」となるのはもちろん、進んで世の中の人を同じ救いの力によって救い上げ、残らず「復活の人」とならしめるために、力を尽くす必要を感ずるのである。